

## 「広がる外来生物」

岸元 良輔

もう4年ほど前ですが、飼いきれなくなったウサギ70匹あまりが千曲市の山中に放されて死んでいたとの新聞記事がありました。放した本人は「山中で生きていけると思った」とコメントし、記事の内容も動物愛護の視点でのみ書かれていて、外来生物の問題としての認識がまったく欠けていることに驚かされました。ペットのウサギはヨーロッパのアノウサギが原種です。そのアノウサギが1850年代にオーストラリアに20匹ほどが放されたそうです。ところが、現在ではほとんど全土に広がり、5億頭から8億頭が生息しているとのこと。このため、牧草の被害が甚大なだけでなく、在来種の有袋類を圧迫して生態系に大きな影響を与えています。千曲市のウサギたちが死んでしまったのは不幸ですが、外来生物の視点からは幸いと言わざるを得ません。

外来生物は人為的に導入されることにより、自然の分布域を越えて生息または生育する生物です。例えば、ペットとしてや緑化のための植物が持ち込まれたり、荷物に紛れ込んだり付着して持ち込まれたりします。外来生物が野生化するとその悪影響として、①日本固有の生態系への影響、②人の生命・身体への影響、③農林水産業への影響があげられています。このため2005年に施行された「外来生物法」には、特に影響が大きい外来生物を特定外来生物に指定して、輸入や飼育を禁止したり、捕獲などの防除を促進したりすることが盛り込まれています(みどりのこえNo.32参照)。

外来生物法の施行や県民の外来生物への関心の高まりから、研究所では2006年度に「外来生物の現状と対策に関する調査研究」を立ち上げました。研究では、県内の特定外来生物を中心に、哺乳類・鳥類・魚類・昆虫類・植物などの外来生物を対象にしています。このうち、今回の公開セミナーでは哺乳類、植物、魚類に関する3題の発表を行いました。

最初は、岸元良輔が「野生化した外国産飼育哺乳類」と題し、哺乳類について長野県内に野生化した2種の特定外来生物を紹介しました。ひとつはアメリカミンク(図1)で、川上村から広がっています。1983~1991年に毛皮獣として飼育されており、ここから逃げ出したものと考えられます(みどりのこえNo.31参照)。分布を把握するため、まず研究所で、その後は環境省の委託でNPO法人ピッキオが調査を行っています。現在、千曲川に沿って80kmほど分布域が広がり、養殖魚や放流

魚に被害を与えています。もうひとつは、アライグマで、ペットとして飼育されていたものが捨てられて、軽井沢周辺で広がりつつあるのをはじめ、全県11市町村で目撃や捕獲が記録されています(環境省長野自然事務所・NPO法人ピッキオの報告書による)。野鳥など外来種の捕食や農作物被害だけでなく、アライグマ回虫などの伝染病も懸念されています。



図1 小海町で撮影されたアメリカミンク。品種改良で様々な体色があるが、佐久地域ではほとんどの個体が黒色。

つづいて前河正昭より、「特定外来生物(植物)の分布と栽培の実態」と題して、植物の事例の発表を行いました。特定外来生物に指定された植物は外来生物法により栽培が禁止されています。しかし、実際には、指定種のリストも、それらの種の見分け方についても、一般にはほとんど知られていないため、知らずに特定外来生物を栽培し続けているという実態が予想されます。そこで、旧長野市を対象に、オオキンケイギク、オオハンゴンソウ、ヤエザキオオハンゴンソウの分布と栽培実態について調べました。その結果、オオキンケイギクはほぼ全域で分布し425地点を確認しました。そのうち170地点が庭、70地点が畑、15地点が道路緑地で意図的に栽培されている状態と判断できました(図2)。ヤエザキオオハンゴンソウは44地点のうち27地点が、オオハンゴンソウは16地点のうち7地点がいずれも庭で栽培されていました。また、数人の地権者に聞き取りを行いました。特定外来生物が普遍的に栽培されている状態は、法律の目的から考えれば本来あってはならない状態は、法律の目的から考えれば本来あってはならない状態は、法律の存在や、指定種の見分け方の一般市民への普及啓発をさらに進める必要があります。



図2 庭や畑で栽培され続けているオオキンケイギク(前河撮影)

最後に北野 聡が「オオクチバスとコクチバス」と題し、魚類の事例を発表しました。特定外来生物の代表種として知られるオオクチバスとコクチバスは、いずれも北米原産のサンフィッシュ科魚類で、今日では日本各地の湖沼に移植され、在来の小魚やエビ類、大型水生動物類の脅威となっています。これらの分布状況の把握や駆除方法開発については、水産庁や県水産試験場が精力的に調査研究を進めてきたことから、当研究所では遺伝子(ミトコンドリアDNA)の分析から分布拡大や侵入経路の推定が行えないか検討してきました。その結果、部分的には地域や湖を特徴づける遺伝子型あるいは遺伝

子型組成が確認でき、今後の分布拡大(河川流出)、新規放流をモニターするための重要な道具となることが明らかとなりました(図3)。

ニュース等にたびたび取り上げられているように、外来生物を安易に野外に広げてしまう例が少なくありません。外来生物が予想外に大きな影響を与えることをしっかりと認識する必要があります。研究所では、今後も県内の外来種の動向について調査研究を継続していく予定です。(きしもと りょうすけ/自然環境部)

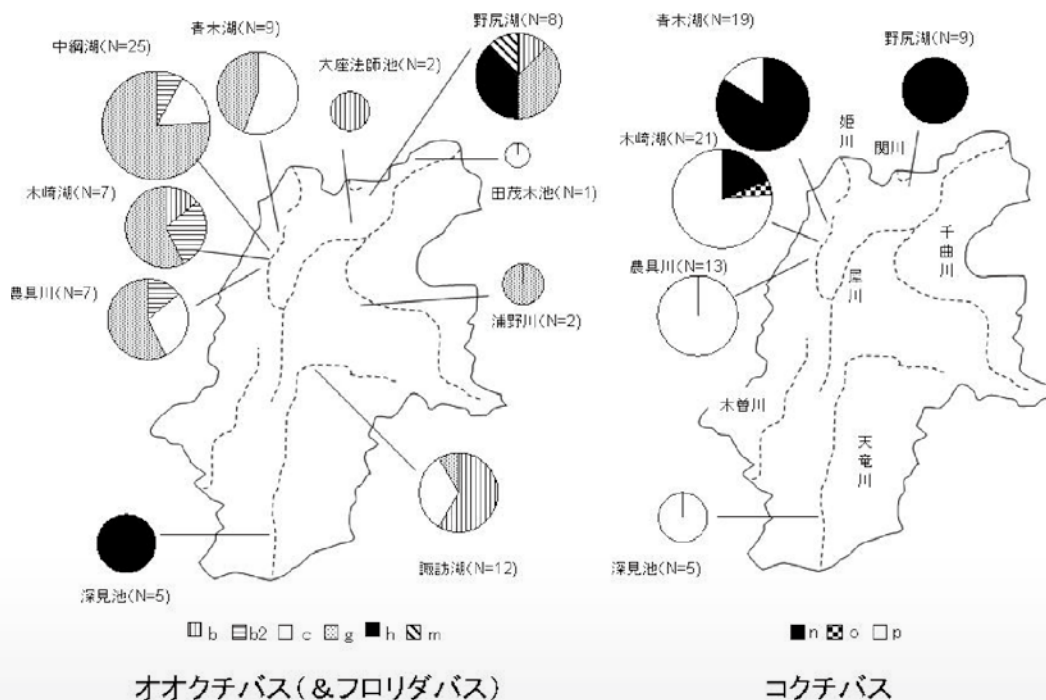


図3 長野県内のオオクチバスとコクチバスの遺伝子型分布(北野ほか2008を一部修正)